

これにみられるように、同父異母兄妹婚のような近親結婚は、富の分散を防ぐ有効な方法として、六、七世紀以降に王権中枢部から始まり、有力氏族の間でも繰り返行われていた。

しかし、同父・同母兄妹の恋愛は現在と同じで厳しく制裁をうけた。

○飛鳥時代の天皇一覧

代	天皇	西暦	元号	特記事項
29	欽明	539		宣化天皇の弟。 仏教伝来。曾我・物部氏の争い。
30	敏達	572		崇仏・廃仏論。
31	用明	585		欽明天皇の第四皇子。聖徳太子の父。 曾我馬子・聖徳太子が物部討つ。
32	崇峻	587		用明天皇の弟。曾我馬子により暗殺。
33	推古	592		崇峻天皇の妹。初めての女帝。摂政・聖徳太子による統治。 冠位十二階制定。十七条憲法制定。遣隋使派遣。
34	舒名	629		敏達天皇の孫。温泉好き。 遣唐使派遣。
35	皇極	642		舒名天皇の皇后。曾我入鹿が執政。
36	孝徳	645	大化・白雉	皇極天皇の弟。難波宮に遷宮。大化の改新で即位。
37	斉明	655		皇極天皇が再即位。唐・新羅と交戦。中大兄皇子が執政。
38	天智	668		中大兄皇子が即位。近江大津宮に遷都。 大化の改新。戸籍制度。壬申の乱で自害。
39	弘文	671		天智天皇の皇子。
40	天武	673	朱鳥	天智天皇の弟、壬申の乱の勝者大海人皇子が即位。 古事記を編纂。律令制度を整備。
41	持統	690		天智天皇の皇女。天武天皇の皇后。藤原宮に遷都。 律令制度の整備。

○日本書紀

基本的に天武天皇が編纂を指示した「日本書紀」をベースに憶測を進めるが、天武天皇らに不都合なことは覆い隠して都合のよいように潤色や曲筆はある程度疑わざるを得ないだろう。天武天皇の意向だろうが、蘇我氏には極めて厳しく、天智天皇には厳しい目を向け、そして政策面の近い孝徳天皇には好意的とされる。母親・皇極天皇の不都合な面は可能な限り覆い隠し、不都合な面は兄・中大兄皇子（のちの天智天皇）の仕業にしている可能性は否定できない。

潤色や曲筆が明らかになったものもあり、全体に疑ってかかる必要があろう。

○飛鳥京図



蘇我氏邸宅から飛鳥板蓋宮を見下ろして、監視しているようにも見える。
欽傍山（うねびのやま）の要塞は飛鳥全体を警護しているし、監視もしているようだ。



○皇極天皇の即位

皇極天皇は、敏達天皇（びたつてんのう）の孫・茅渟王*1（ちぬのおおきみ）と吉備姫王（きびひめのおおきみ）の間で生まれた王女・宝皇女（たからのひめみこ）で、はじめ高向王（たかむくのおおきみ、用明天皇の孫）と結婚して、漢皇子（あやのみこ）を産んだ。

*1 茅渟王；日本書紀では敏達天皇（びたつてんのう）の皇子・押坂彦人大兄皇子（おしさかひこひとのおおえのおうじ）の皇子とするのみで、まとまった系譜は伝えていない。

吉備姫王；日本書紀では吉備姫王の出自は沈黙している。1426年に成立した天皇家の系図・「本朝皇胤紹運録（ほんちょうこういんじょうんろく）」には欽明天皇（きんめいてんのう）の皇子・桜井皇子の娘とあるが、正否は明らかではない。

高向王と突然分かれて舒明天皇に嫁いだと憶測されるが、日本書紀には経緯について一切触れていない。触れたくないのだろう。

舒明天皇との間に、中大兄皇子（なかのおおえのおうじ、のちの天智天皇、舒明天皇と宝皇女の皇子）・間人皇女（はしひとのひめみこ、孝徳天皇の皇后）・大海人皇子（おおあまのおうじ、のちの天武天皇）を儲けた。

630年、宝皇女は37歳で舒明天皇（じょめいてんのう）の皇后に立てられる。

641年11月、舒明天皇が、次期天皇を指名しないまま崩御したことから、皇位継承争いが激化する。蘇我一族の推す古人大兄皇子（ふるひとのおおえのみこ、舒明天皇と蘇我法提郎媛（そがのほほてのいらつめ）の第1皇子、入鹿の従兄弟）、山背大兄王（やましろおおえのおう、厩戸皇子（うまやどのおうじ）の皇子）そして中大兄皇子の3人が候補に挙がるが、誰を選んでも政治的緊張が高まるのは必至。そんな三すくみの状況を打開するべく、蘇我氏宗家・蘇我蝦夷（そがのえみし）の要請によって立てられたのが、宝皇女だった。このとき、宝皇女はすでに49歳。自らの意志とは無関係に、皇極天皇（こうぎょくてんのう）となり女帝の道を歩み始めたと言われる。

『日本書紀』によれば、皇極天皇は古の道に従って政（まつりごと）を行った。在位中は、蝦夷が大臣（おおおみ）として重んじられ、その子・入鹿（いるか）が自ら国政を執った。

○山背大兄皇子の自害

政治の実権が蝦夷からその子・入鹿に移ると、入鹿は蘇我氏の意のままになると見られる古人大兄皇子の擁立を企て、対立候補である斑鳩宮の山背大兄王を襲い、斑鳩寺にて一族共に自害させて排除した。このことを知った蝦夷は、「自分の身を危うくするぞ」と嘆いたと言われる。

『藤氏家伝』（とうしかでん、藤原氏代々に伝わる藤原氏初期の伝記）に「皇極天皇即位に関して山背大兄王が謀反を起こす恐れがあるため他の皇族と謀って殺害した（つまり犯行は入鹿の独断ではない）」と『日本書紀』とは矛盾する記載があり、この襲撃には、軽皇子（かるのみこ、のちの孝徳天皇）など多数の皇族が加わっていたとされ、入鹿と山背大兄王への優位を画策する諸皇族の思惑が一致したからこそ発生した事件とも言われている。

おそらく、入鹿単独でなく諸皇族と謀って起こした事件というのが本当だろうが、すべての罪を入鹿にかぶせるように曲筆したのでだろう。

○蘇我蝦夷と入鹿の専横

644年11月、入鹿は甘櫨丘（あまかしのおか）に邸宅を築き、蝦夷の邸宅を「上の宮門（うえのみかど）」、入鹿の邸宅を「谷の宮門（はざまのみかど）」とし、さらに自分の子女達を王子（みこ）と呼ばせた。家の外に城柵を作り、恒に兵に守らせた。出かけるときには恒に50人の兵士に身を守らせた。また、畝傍山（うねびのやま）に要塞を築き、皇室行事を独断で代行したと言われた。これら

の政策により、入鹿は実質最高権力者としての地位を固め、その治世には人々は大いに畏敬し、道に落ちているものも拾わなくなったといわれた。

(群臣でありながら、王族のように呼称を用いる蘇我氏の専横が目には余るとの日本書紀の記述であるが、潤色や曲筆があったと疑わざるを得ないだろう。)しかし、そのような入鹿の天下は長くは続かなかった。

○「乙巳の変」と蘇我氏宗家の滅亡

645年7月10日、中大兄皇子(後の天智天皇)・中臣鎌足らにより蘇我入鹿が飛鳥板蓋宮(あすかいたぶきのみや)の大極殿において皇極天皇の御前で殺害された。いわゆる乙巳の変(注.1)である。それを知った蘇我蝦夷が邸宅に火を放って自害し、蘇我宗家が滅亡する。

注記1. 乙巳の変とその後の古人皇子の処刑

○「乙巳の変」(いっしのへん)

645年、「中大兄皇子」(なかのおおえのおうじ)と「中臣鎌足」(なかとみのかまたり)が、「蘇我入鹿」(そがのいるか)を皇居内で暗殺し、蘇我入鹿の父「蘇我蝦夷」(そがのえみし)を自害させ、蘇我氏を滅ぼした政変。

日本書紀によると、このとき入鹿が「当(まさ)に嗣位(ひつぎのくらい)に居(ましま)すべきは、天子(あめのみこ)なり。臣(やっこ)罪を知らず。乞ふ、垂審察(あきらめたま)へ」ともうす。天皇大きに驚きて、中大兄皇子に「知らず、作(す)る所、何事有りつるや」と問うたときに、皇子が「鞍作(くらつくり、入鹿)、天宗(きみたち)を尽くし滅ぼして、日位(ひつぎのくらい、天皇の位)を傾けんとす。豈天孫(あにあめみま)を以て鞍作に代へむや」と答えた。

これを聞いて皇極天皇は無言のまま殿中へ退いたとされる。

この記述から分ることは

- ・入鹿には皇位を奪おうとする意図は無かった。
- ・入鹿は暗殺されようとしているとき、皇極天皇に自分の罪を問うた。
- ・この事件に天皇は関知していなかった。
- ・皇極天皇が入鹿暗殺を止めに入らず、殿中に退いた。

である。

大王の権威を取り戻し、天皇中心の中央集権国家を推進するために蘇我宗家を排除したとの説もあるが、それなら日本書紀に書かれていてもよいはずである。天武天皇(大海皇子)は事情をよく知っていたはずなのにあえて背景を書かなかったのは謎である。

中大兄皇子は「入鹿が皇族を滅ぼして、皇位を奪おうとした」と本当に思っていたのか、それとも皇子にとって皇位継承者争いの障害になる蘇我宗家を滅ぼすための大義名分にしただけなのか？

疑問が残るにせよ、「乙巳の変は中大兄皇子等の皇位継承の争いと天皇中心の中央集権国家を目指すためだった。」というのが妥当のようだ。

○古人大兄皇子の処刑

事件後、後ろ盾を失った古人大兄皇子は皇位継承の意志がないことを伝え吉野で出家するが、数カ月後、古人大兄皇子は蘇我氏の血を引いていたため謀反を企てたとされ、中大兄皇子が送った兵によって処刑される。

○譲位

乙巳の変の翌々日には皇極天皇は中大兄皇子に位を譲ろうとした。中大兄皇子は辞退して軽皇子（かるのみこ、皇極天皇の同母弟）を推薦した。軽皇子は三度辞退して、入鹿とは従兄弟に当たる古人大兄皇子を推薦したが、古人大兄皇子は辞退して出家する。

軽皇子は血筋からして本来皇位には遠い存在だが、皇極天皇は同母弟の軽皇子に大王位を譲る。これまでの群臣の推挙による皇位継承が、新帝の選出を王権内部が主導することになった。

日本史上初の譲位（注.2）をしたのは、皇極天皇がクーデターに並々ならない衝撃を受けたためとの説もあるが、譲位、後継指名までの展開が早く、筋書き通りのようにも見えるし、謎である。

注記 2. 史上初の譲位の背景

乙巳の変の後、皇極天皇が前代未聞の譲位した背景は書かれていないが、佐藤長門氏の説を紹介する。

「乙巳の変はこれまでの大王（天皇）の終身性を否定し、皇極天皇による譲位を引き起こした。その意義について乙巳の変は、蘇我氏のみならず、蘇我氏にそれだけの権力を与えてきた皇極天皇の王権そのものに対する異議申し立てであり、実質上の「王殺し」に匹敵するものであった。ただし、首謀者の中大兄皇子は皇極天皇の実子であり実際には大臣の蘇我氏を討つことで異議申し立てを行い、皇極天皇は殺害される代わりに強制的に退位を選ばざるを得ない状況に追い込まれた。」とある。

それなら譲位後に早々と表舞台から去っているはずだが、他に例のない『皇祖母尊』の尊号を得たことや重祚して表舞台に立っている。政権の中心人物として権勢を維持し続けたことを示唆しているのも、佐藤氏の説はこれと矛盾しているように思われる。乙巳の変にかかわっていたからではないだろうか。

○孝徳天皇の改新と崩御

新政権は難波に遷都し、新しい国作りへの決意を示し、政治改革に着手する。

- 646年には「改新の詔」と発布し、いわゆる「大化の改新」を推進する。
- 645年12月、都を難波長柄豊崎（なにわのながらのとよさき）に遷した。
- 646年、新大王の孝徳天皇より、前の大王に「皇祖母尊（すめみおやのみこと）」の称号を奉まつる。（皇太后より一段と高い尊称であり、異例である）。
- 646年、「改新乃詔（かいしんのみことのり）」を発布する。（注.3）
- 647年、七色十三階の冠を制定した。
- 649年、冠十九階を制定した。
- 650年、元号を白雉（はくち）に改元する。
- 652年、戸籍を造った。
- 652年、難波長柄豊碕宮が完成する。
- 653年、百済と新羅が使を遣わして調（支配下にある国や人民が服従のしるしとして君主に献上する物品）の貢ぎ物を献じた。
- 653年、中大兄皇子は孝徳天皇に難波から大和へ都を遷すことを相談するが、天皇は認めない。こうして中大兄皇子と孝徳天皇の間に溝ができていき、中大兄皇子は皇極天皇や同母弟・大海人皇子、同母妹で天皇の皇后・間人皇女（はしひとのみこ）や都の役人らを連れて飛鳥河辺行宮（あすかのかわべのかりみや）にもどってしまう。

（中大兄皇子が大和に都を遷そうとしたのは「唐の脅威や朝鮮半島の戦乱に対応するため、大和の豪族を掌握する必要性が生じた」との説がある。難波宮に移り住むことに不満を持ち、大和に残った多くの豪族の協力を得るためには都を大和に遷す必要があるということだろうか？）

孝徳天皇は難波に一人残され寂しく暮らすうちに、皇位を捨てて山崎（京都府乙訓郡大山崎町）に移り住むことを考えるようになる。そして宮を山碕（京都府乙訓郡大山崎町）に造らせ、歌を皇后に送った。

『金木着け 吾が飼ふ駒は 引出せず 吾が飼ふ駒を 人見つらむか』

（逃げないように首にはめておく木をつけて私が飼っている駒をどうして他人が見たのだろう）

他人は中大兄皇子とされ、愛する間人皇女が中大兄皇子と心を合わせて大和へ去ったことを嘆じた歌とされる。

（間人皇女が夫である天皇を置いて、兄の葛城と共に飛鳥に遷ったのは同母兄妹の恋愛が背景にあるとの説があるが、例え歌の意味がそ

うであったとしても、それは飛鳥に遷った人たちの思いや意図を理解しようとしないう孝徳天皇の邪推ではなかろうか？)

- 654年、遣唐使を送った。
- 654年、難波の都で孝徳天皇は気を落として病になる。この知らせを聞いて中大兄皇子や皇祖母尊、大海人皇子、間人皇女らは見舞いに出かけている。しかし、10月10日、孝徳天皇は寂しくこの世を去る。孝徳天皇の皇子・有間皇子（ありまのみこ）はこのとき15歳。

難波宮は孝徳天皇即位の7年後の652年に完成している。遺跡発掘調査ではのち藤原京や平城京のような碁盤目状の区画は見つからず、発展途上だったらしい。

○齊明天皇

655年、皇祖母尊が板蓋宮（いたぶきのみや）にて再度即位し、齊明天皇となる。史上初の重祚（ちょうそ、一度退位した天子が再び即位すること）である。政治の実権は皇太子の中大兄皇子が執る。

中大兄皇子が即位しなかったのは謎である。30歳でも若過ぎるというのだろうか？

齊明天皇は板蓋宮から飛鳥川原宮（あすかかわはらのみや）、ついで後飛鳥岡本宮（のちのあすかのおかもとのみや）に遷った。その後も大土木事業をおこしたが、とくに石上山（いそのかみやま）に通じる大水渠（だいすいきよ）を、時の人は呆れて狂心渠（たぶれこころのみぞ）と非難したという。石上山の石を切り出して後飛鳥岡本宮の石垣に用いたとされ、大量の石材を舟で運ぶための運河を掘らせ、工事には3万人余を要したとされる。

齊明女帝の政治は、皇太子・中大兄皇子の輔（たす）けを受けて進められたが、658年の有馬皇子謀殺事件（注.4）、そして肅慎（みしはせ）と蝦夷（えみし）征討（注.5）をはじめ国内政局は安定せず、国際的には朝鮮関係のうち、とくに対新羅（しらぎ）関係が緊迫した。

唐・新羅連合の圧力に苦しむ百濟（くだら）の救援要請を受け、660年から百濟救援軍派遣（注.6の「朝鮮半島への介入」による）の準備を進め、661年1月6日、自身も西に向かって出航。5月9日には筑紫の朝倉橘広庭宮（あさくらのたちばなのひろにわのみや）に遷幸し、ここを本宮とする。しかし同年7月24日、朝倉宮で急逝した。

日本書紀には死因については触れられていないが、倭国にとって大事な時期での突然の死であり、死因について何も書かれていないのは謎である。

注記4. 有馬皇子謀殺事件

有馬皇子は孝徳天皇と小足媛（おたらしひめ、安倍内麻呂の娘）の皇子。

658年、蘇我入鹿の従弟・蘇我赤兄（そがのあかえ）が有間皇子邸を訪れ、斉明天皇や中大兄皇子の失政を指摘し、自分は皇子の味方であると告げて謀反をそそのかした。その言葉を信じた有馬皇子は、喜び、斉明天皇と中大兄皇子を打倒するという自らの意思を明らかにした。翌日には赤兄邸を訪問。が、ともに謀議したはずの赤兄の兵に捕らえられてしまう。赤兄と中大兄皇子は裏でつながっていたに違いない。中大兄皇子に「なぜ謀略を企てたのか」と問われ、有馬皇子は「天と赤兄が知っている、私は何も知らない」とだけ答えた。その後、都へ送られる途中、藤白坂（海南市藤白）で絞殺された。19歳という短い生涯を終えた。

斉明天皇が紀の湯（南紀白浜）に行幸している間の出来事とされる。

注記 5. 肅慎（みしはせ）、蝦夷（えみし）征討

肅慎；『日本書紀』や『続日本書紀』などの中に記述が見られる民族である。

オホーツク文化人（3世紀～13世紀）ではないかという説がある。

オホーツク人は遺伝子分析の結果から現在の樺太北部に住むニヴフ民族等の祖先とされ、北海道のオホーツク沿岸や樺太などに当時の遺跡が見られる。

蝦夷；日本古代史上、北東日本に拠（よ）って、統一国家の支配に抵抗し、その支配の外に立ち続けた人たちの呼称。「えみし」「えびす」ともいう。

日本書紀には阿倍比羅夫（あべのひらふ、冠位は大錦上。越国守・後將軍・太宰帥を歴任した）の6件の征討についての記事がある。

- ・ 658年4月、180艘の船を率いて蝦夷を討伐する
- ・ 658年是歳（詳しい月日は不明という意味）、肅慎討伐とヒグマの献上
- ・ 659年3月、180艘の船を率いて蝦夷を討伐する
- ・ 659年3月、肅慎討伐と捕虜献上
- ・ 660年3月、肅慎討伐
- ・ 660年5月、肅慎の捕虜献上

注記 6. 朝鮮半島への介入と斉明天皇崩御

○朝鮮半島への介入の経緯

百濟滅亡の後、百濟の遺臣は鬼室福信（きしつふくしん）・黒齒常之（こくしじょうし）らを中心として百濟復興の兵をあげ、倭国に滞在していた百濟王の太子・扶余豊璋（ふよほうしょう）を擁立しようと、倭国に救援を要請した。斉明天皇と中大兄皇子はこれを承諾し、百濟難民を受け入れるとともに

に、百済を復興して朝鮮半島における倭国の優位性を復活させようと考え、百済救済の大軍を派遣することに決した。

この決断の裏には、658年に、「阿倍比羅夫」（あべのひらふ）を送り込み、北方を拠点としていた「蝦夷」（えみし）と「肅慎」（みしはせ）を平定し支配区域を拡大した実績が、大きく関係しているとの説がある。

661年、齊明天皇は自ら九州へ出兵するも‘那の津’（福岡県福岡市中央区）にて急死した（享年68、暗殺説あり*1¹）。齊明天皇崩御にあたっても皇子は即位せずに称制（しょうせい、先帝死去の後、即位式を行っていない新帝あるいは皇族が執政する）し、朴市秦田来津（えちのはたのたくつ、造船の責任者）を司令官に任命して全面的に支援した。この後、倭国軍は三派に分かれて朝鮮半島南部に上陸した。

○齊明天皇の崩御

661年の主な出来事

- ・7月24日、朝倉宮で崩御。
- ・8月1日、皇太子が天皇の喪（みも）に付き添い、磐瀬宮（福岡県筑紫市）に到着。
- ・10月7日、天皇の喪が帰りの海路に出航。

皇太子が口号（くちうた、詩歌・俳句などを口ずさむこと。）して曰（のたま）はく

「君が目の 恋しきからに 泊（は）てて居て かくや恋ひむも 君が目を欲（ほ）り」

ただあなたの目の恋しいばかりにここに舟泊まりしていて、これ程恋しさに耐えないのも、あなたの目を、一目見たいかりなのです。

- ・10月23日、天皇の喪が難波津に着く。

11月7日、飛鳥の川原で殯（もがり*2）した。

*2；日本の古代に行われていた葬送儀礼。死者を埋葬するまでの長い期間、遺体を納棺して仮安置し、別れを惜しみ、死者の靈魂を畏れ、かつ慰め、死者の復活を願いつつも遺体の腐敗・白骨化などの物理的変化を確認することにより、死者の最終的な「死」を確認すること。）

- ・9日まで発哀（はつあい、死者を弔うために泣き声をあげる礼の一つ）。

○白村江の戦い

663年白村江の戦いが起こる。

だがこの時点で、百濟陣営は全く統率が取れていなかった。豊璋は戦乱への自覚が足りず、黒齒常之ら将は当初から豊璋を侮る状態であった。鬼室福信は豊璋によって殺害された。

白村江で唐・新羅軍に惨敗した倭国水軍は、各地で転戦中の倭国軍および亡命を望む百濟遺民を船に乗せ、唐・新羅水軍に追われる中、やっとのことで帰国した。

○戦いの後

唐との友好関係樹立が模索されるとともに急速に国家体制が整備・改革され、天智天皇の時代には近江令法令群（法令体系。全22巻。古代日本政府による最初の律令法典に位置づけられるが、原本は現存せず、存在を裏付ける史料にとぼしいことから、存在説と非存在説の間で激しい論争が続いている。どちらの説も、律が制定されなかったという点では、ほぼ見解が一致している）。天武天皇の代には最初の律令法とされる飛鳥浄御原令（あすかきよみはらりょう、体系的な法典。令22巻。律令のうち令のみが制定・施行されたものである。日本史上、最初の体系的な律令法と考えられているが、現存しておらず、詳細は不明な部分が多い。）の制定が命じられるなど、律令国家の建設が急いで進み、倭国は「日本」へ国号を変えた。

白村江の敗戦は倭国内部の危機感を醸成し、日本という新しい国家の体制の建設をもたらしたと考えられている。

磐瀬行宮跡



朝倉橋広庭宮跡



福岡県中間市、JR中間駅のすぐ近くにある。

2. 主な出来事のまとめ

年度	主な出来事
594年	茅渟王と吉備姫王の第1皇女・宝皇女として生まれる。

	高向王と結婚し、漢皇子を産む
626年	中大兄皇子誕生。(宝皇女33歳)
630年	37歳にて舒明天皇の皇后に立てられる。 舒明天皇との間に中大兄皇子(天智天皇)・間人皇女・大海人皇子(天武天皇)を産む
641年	11月、舒明天皇が崩御する
642年	1月、皇極天皇として即位する この夏、飛鳥の地は大干ばつに見舞われた。当時、天変地異は為政者の不徳、と考えられていたため、大臣の職についていた蘇我蝦夷は、大勢の僧を呼んで雨乞いを実施。4日間に渡って読経させたが、小雨が降った程度で断念してしまった。その様子を見かねた皇極女帝は、飛鳥川の川上、女淵付近に櫓を組み、自ら雨乞いを実施。すると突如大雨が降り、民は皇極女帝を「至徳まします天皇なり」と称えたとされる。
643年	<ul style="list-style-type: none"> ・1月、小墾田宮に遷幸 ・5月、飛鳥板蓋宮(あすかいたぶきのみや)に遷幸。 ・12月16日、入鹿は蘇我氏の血をひく古人大兄皇子を皇極天皇の次期天皇に擁立しようと望んだ。そのためには有力な皇位継承権者である山背大兄王の存在が邪魔であると考えた。入鹿は軍勢をさしむけ、山背大兄王の住む斑鳩宮を攻めさせた。これに対し山背大兄王は、舎人数十人をもって必死に防戦したが、持ちこたえられず生駒山へ逃れた。そこで側近の三輪文屋君からは東国へ逃れて再挙することを勧められるが、山背大兄王は民に苦しみを与えることになると採り上げなかった。山背大兄王は斑鳩寺に戻り、王子と共に自殺。このことによって厩戸皇子の血を引く上宮王家は滅亡した。入鹿が山背大兄王一族を滅ぼしたことを知った蝦夷は、「自分の身を危うくするぞ」と嘆いたとされる。
645年	<ul style="list-style-type: none"> ・7月10日、『乙巳(いっし)の変』勃発(注.1)。中大兄皇子(20歳)と中臣鎌足(32歳)が蘇我入鹿を討つ。蝦夷は自害する。 ・皇極天皇の同母弟・軽皇子(かるのみこ、孝徳天皇、50歳)に大玉位を譲る。日本史上初の譲位である。 ・孝徳天皇は中大兄皇子を皇太子とする。 ・史上初めて元号を定め、大化元年とする。 ・古人大兄皇子が謀反を企てたとされ、中大兄皇子が古人大兄皇子を討つ。

646年	<ul style="list-style-type: none"> ・6月、新大王の孝徳天皇より、宝皇女に皇祖母尊（すめみおやのみこと）の称号が奉られた。一段と高い尊号である。 ・改新の詔を發布（注.2）
647年	七色十三階の冠を制定
648年	大友皇子、生まれる。天智天皇の第一皇子。母は伊賀采女宅（いがのうねめ・やかこのいらつめ）。
649年	<ul style="list-style-type: none"> ・2月、冠十九階を制定 ・3月17日、安倍倉梯麻呂（あべのくらはしのまろ、内麻呂もいう）は朱雀門に出て哀哭、嘆いた。 倉梯麻呂は豪族を代表する重鎮として、また娘の小足媛を孝徳天皇の妃とし、有馬皇子を儲けていることから新政権の中枢に加えられたと考えられる。 ・3月24日、蘇我倉山田石川麻呂（そがのくらやまだのいしかわまろ）異母弟・蘇我日向が皇太子に石川麻呂が謀反を起こそうとしていると讒言した。天皇が軍兵を起こしたため、石川麻呂は逃げた。この事件は中大兄皇子と中臣鎌足の陰謀であったとされている。 ・3月25日、蘇我倉山田石川麻呂が自殺。 ・3月26日、追討した軍が蘇我倉山田石川麻呂の首を斬る。 ・4月20日、巨勢徳陀古（こせのとこたこ）を左大臣に、大伴長徳（おおとものながとこ）を右大臣にする。 ・5月1日、三輪色夫（みわのしこぶ）と掃部角麻呂（かにもりのつぬまろ）を新羅に遣わす。
650年	2月、元号を「大化」から「白雉」（はくち）に改める。
651年	<ul style="list-style-type: none"> ・健皇子（たけるのおうじ）、生まれる。 父；天智天皇、母；蘇我山田石川麻呂娘・遠智娘（おちのいらつめ） ・12月30日、都を難波長柄豊碕（なにわのながらのとよさき、大阪府中央区法円坂町）に遷す。
652年	戸籍を造る
653年	<ul style="list-style-type: none"> ・皇太子（中大兄皇子）が倭京（飛鳥に置かれた宮都を含む、倭国の首都機能を有して大和にあった宮都）に遷ることを請うたが、天皇は許さなかった。皇太子は、皇祖母尊（すめみおやのみこと、皇極前天皇）と皇后（間人）、皇弟を連れて飛鳥河辺行宮（あすかのかわべのかりみや、飛鳥川の上流、稲淵川左岸の平坦な水田地にある。）に行った。公卿大夫（まえつきみ）・百官の人らが皆随（したが）って遷（うつ）った。天皇は恨んで皇位を去りたいと思い、宮を山碕（京都府乙訓郡大山崎町）に造らせ、歌を皇后に送った。

654年	<ul style="list-style-type: none"> ・10月1日、天皇の病を聞き、皇太子が皇祖母尊（すめみおやのみこと）・皇后・皇弟・公卿らを率いて難波宮に赴いた。 ・10月10日、孝徳天皇が崩御。元号「白雉（はくち）」が使用されなくなる。
655年	<ul style="list-style-type: none"> ・1月3日、皇祖母尊（すめみおやのみこと）が飛鳥板蓋宮で再び即位（重祚）し、斉明天皇となる。 政治の実権は皇太子の中大兄皇子が執る。 ・飛鳥板蓋宮が火災にあい、川原宮に遷る。
656年	<ul style="list-style-type: none"> ・岡本宮に遷幸するが、火災に遭う。多武峰（とうのみね、桜井市南部の山）に両槻宮（ふたつきのみや）を作る。
658年	<ul style="list-style-type: none"> ・5月、健皇子（たけるのおうじ/たけるのみこ）死没。斉明天皇の皇孫である。話すことが不自由で夭折したが、斉明天皇の寵愛を受けたことで知られる。 ・11月11日、中大兄皇子が有馬皇子（孝徳天皇の皇子）を絞首刑にする。
659年	<ul style="list-style-type: none"> ・3月、阿倍比羅夫に蝦夷国を討たせる。 ・阿倍比羅夫、後方羊蹄（しりべし）に郡領を置く。肅慎（みしはせ）（オホーツク文化人）と戦って帰り、虜49人を献じる。
660年	<p>唐が朝鮮半島に侵攻。それにより、長年にわたって日本と深いつながりを保って来た百済が滅亡する。天皇は百済の復興運動を後押しすべく、救援軍を編成。陣頭指揮をとるため、皇太子の中大兄皇子らを引き連れて、みずから九州へと赴く。</p>
661年	<ul style="list-style-type: none"> ・1月6日、西に向かって出航 ・3月25日、磐瀬行宮（福岡県）に居す。 ・5月、朝倉の地（福岡県朝倉市）に大本営となる朝倉橘広庭宮を造営。 ・7月24日、朝倉宮にて崩御（享年68） <p>『日本書紀』には「天皇（すめらみこと）、朝倉宮に崩（かむあがりましぬ）」とだけ記載されている。</p> <p>急な死であり、死因が記載されていない。謎である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・皇太子は天皇の喪に付き添い、飛鳥に帰る。
663年	<p>10月、倭と百済の連合軍が白村江の戦いで敗戦する。</p>
667年	<p>4月、近江大津宮に遷都する。</p>

668年	2月、中大兄皇子が即位し、天智天皇となる。
671年	10月、中大兄皇子、崩御（わずか4年足らずの在位）

3. 朝鮮半島の三国時代と倭国



○半島の情勢

・4～5世紀

広開土王碑文（*3）によれば391年以来、倭が海を渡り百済と新羅を臣民としたが、高句麗は396年に百済を破り百済王を服属させた。しかし399年に百済王が誓約を破り倭国と和通したため、翌400年には新羅へ出兵して倭軍を駆逐し、404年には帯方に侵入した倭を撃退、407年にも百済へ出兵して6城を奪ったという。この碑文の解釈を巡っては諸説入り乱れており、史実性を巡って議論があるが、百済と高句麗が倭国も交えて長期に亘り戦いを続けていたこと自体は間違いがない。

427年、第20代国王・長寿王は奪回した平壤へ遷都し、本格的に朝鮮半島方面への経営に乗り出した。華北の北魏との関係が安定するといよいよ百済に対する圧力は強まり、455年以後、高句麗による百済への侵攻が繰り返された。これに対して百済は、この頃に高句麗の影響力の低減を目指していた新羅と結び、472年、北魏にも高句麗攻撃を要請した。

*3. 広開土王碑文

この碑は高句麗第19代の王である好太王の業績を称えるため、その息子である長寿王が414年に建立したものだ。

現在の中華人民共和国吉林省通化市集安市に存在する石碑である。その概要は

・ 前述したように百済・新羅は高句麗の支配下だったが、5世紀になって倭が百済・新羅を攻めて支配してしまった。

さらに百済が高句麗との盟約を破り、倭と同盟を結んだので、好太王は怒って百済に侵攻。

・ ちょうどその時、新羅では多くの倭人が都に侵入しており、それを嫌がった新羅が高句麗に忠誠を誓い、好太王は救援を許可。

彼は5万の大軍を派遣し、倭は新羅・高句麗連合軍に敗北した。

(=倭・高句麗戦争)

・ 7世紀

643年には長年戦いを続けてきた高句麗と百済の間で和睦が成立した。劣勢となった新羅でも642年に善徳王を中心とする権力体制が成立した。

高句麗と百済からの圧迫を受けて、新羅は643年に唐に救援を求めたが、このときに唐からの救援は得られず、逆に女王を退けて唐の皇族を新羅王に据えることを要求された。

645年以後、高句麗は唐軍の遼東侵略を三度撃退した。661年には新羅・唐連合軍が南方から攻撃し、王都平壤城に迫ったが、これを撃退した。

668年9月、新羅・唐連合軍は、王都平壤城を攻略して、高句麗を滅ぼした。

『乙巳の変』時には高句麗・百済連合と新羅は国の存亡をかけた極度の緊張状態にあったことが分かる。

また、倭国は半島の国々から連続的ではないにしても朝貢を受けていたので、重要であり、唐に取り込まれないように最大限の努力をしたのだろう。

○倭国と半島三国の主な出来事

	倭国	百済	高句麗	新羅
642年	皇極天皇即位	新羅に大打撃を与える		善徳女王が権力体制を確立
643年		高句麗と和睦する		高句麗と百済からの圧迫を受けて唐に救援を求めたが、得られず

645年	<ul style="list-style-type: none"> ・7月、乙巳の変が起こる ・8月、高句麗・百済・新羅の使者が朝貢した。任那の調を代行した百済の使者に対し、調の不足を叱責した。 		新羅との和睦を求める唐の要求を拒絶。唐の太宗の親征を撃退。	
655年	齊明天皇即位（重祚）		百済と共に新羅に出兵	
656年	9月、高句麗が大使に達沙、副使に伊利之、総計81人を遣わし、調を進める。			
660年	<ul style="list-style-type: none"> ・高句麗の使者、賀取文ら百人余が筑紫に到着。 ・鬼室福信が貴智らを遣わして唐の俘百余人を献上し、援兵を求め、皇子の扶余豊璋の帰国を願う。天皇は百済を助けるための出兵を命じ、また、礼を尽くして豊璋を帰国させるよう命じる。 ・百済への救援軍を編成 	唐・新羅連合軍に滅ぼされる		唐と組んで百済を滅ぼす
661年	百済の福信が、使を遣わして王子・紇解の帰国を求める。		唐・新羅連合軍に攻撃されるが撃退する	
663年	白村江の戦いで倭国が惨敗する			
668年	中大兄皇子が即位し、天智天皇となる		唐により滅亡される	唐と組んで高句麗を滅ぼし、朝鮮半島を統一する

4. まとめ

基本的に史料は日本書紀に拠るが、「日本書紀は、古事記とともに637年に皇位について天武天皇の勅による編纂事業である。720年に完成した日本書紀

はライバルである有力豪族に対し、神代から続く天皇家の血筋の優秀性と日本国の統治者であるという正統性を再認識させようとしたもので、天皇家に都合の悪いものは隠蔽し、都合のよいように曲筆や潤色があると歴史家が指摘している。

例えば、藤原京から出土した木簡により『日本書紀』に見える「改新の詔」の内容のように、編者によって潤色されたものであることが明白になっているものもある。

日本書紀をそのまま鵜呑みにはできないので憶測を挟む。

① 舒明天皇の皇后になった背景

宝皇女（のちの皇極天皇）は高向王（用明天皇の孫、田目皇子の皇子）と結婚し、漢皇子（あやのみこ）を儲けていたが、あえてこれを解消して舒明天皇と再婚している。周囲の意向は別にして、自らの意志で皇后になることを熱望し、積極的に応じたのではなかろうか。

これ以前に田眼皇女（ためのひめみこ、父；敏達天皇、母；推古天皇）が甥の舒明天皇の妃となっている。子女は不詳とされているので、居なかったのだろう。

626年、宝皇女は中大兄皇子を儲け、そして630年、皇后になる。

敏達天皇と推古天皇の皇女・田眼皇女より天皇との血統が遠く且つ高向王との婚姻経験のある宝皇女（のちの皇極天皇）が皇后になったのは田眼皇女が既に死没していたからだとの憶測もあるが、田眼皇女は子宝に恵まれなくて後継候補の皇子がいなかったことで皇后になれなかったのではなかろうか。

○田眼皇女及び宝皇女の生誕から即位までの主な出来事

年度	主な出来事
? 不詳	田眼皇女、生まれる
585年	9月14日、田眼皇女の父・敏達天皇が崩御。
593年	舒明天皇、生まれる
594年	宝皇女、生まれる
?	田眼皇女、舒明天皇と結婚

？	宝皇女、舒明天皇と結婚
626年	中大兄皇子、生まれる。 これ以前に皇女が舒明天皇と結婚
629年	舒明天皇、即位（37歳）。これ以前に田眼皇女死没説？
630年	宝皇女、舒明天皇の皇后に立てられる
641年	11月17日、舒明天皇が崩御
642年	2月19日、皇極天皇として宝皇女が即位

これらより田眼皇女は舒明天皇より少なくとも8歳は年上だったとされる。田眼皇女は子宝に恵まれず、これ以上待っても子宝に恵まれないと分かった時点で、急遽出産経験のある宝皇女が舒明天皇に嫁ぎ、中大兄皇子等の子宝に恵まれた後に皇后になったと憶測する。

異説に、「宝皇女は皇后にならなかったが、天智天皇や天武天皇の生母として皇后の地位を付与した日本書紀の曲筆である」というのもあるが、うがち過ぎのように思われる。

いずれにしても憶測の域を出ないので謎が残る。

○天皇の後宮に入った女性のランク

皇后や妃になれるのは皇族のみである。

- ・后（こうごう/おおきさき）
- ・妃（ひきさき） - 2名以内、四品以上の内親王
- ・夫人（ぶにん/おおとじ） - 3名以内、三位以上（公卿）の娘
- ・嬪（ひん/みめ） - 4名以内、五位以上（貴族または豪族）の娘

② 即位の背景

蘇我一族の推す舒明天皇の皇子・古人大兄皇子、そして厩戸皇子の皇子・山背大兄王と舒明天皇の皇子・中大兄皇子の3人が天皇の候補に挙がるが、誰を選んでも政治的緊張が高まるのは必至とされ、そんな三すくみの状況を打開するべく、蘇我氏宗家・蘇我蝦夷（そがのえみし）の要請によって立てられたのが、宝皇女だった。このとき、宝皇女はすでに49歳。642年、自らの意志とは

無関係に即位し皇極天皇（こうぎょくてんのう）となり、女帝の道を歩み始めたとされる。

この時点では中大兄皇子はまだ17歳で若かったので、その成長を待つための中継ぎの為の即位だったとも憶測できるが、決して受け身ではなく、積極的に天皇の仕事に取り組んでいるように思われる。

日本書紀によれば、

「この年に大かんばつが発生。最初に村で祭祀を担当していた祝部（はふりべ）が雨乞いをするが効き目が無く、次に大臣の蘇我蝦夷が雨乞いを行った。寺々に命じて大乘経典を転読させて雨乞いを行わせ、多くの僧を集め降雨を祈る大雲経を読ませた。そして蝦夷自身が焼香して発願すると小雨が降ったが、翌々日には、それ以上雨乞いができずに読経をやめた。

最期に皇極天皇が飛鳥川の上流にあたる南淵で天に向かって雨乞いをしたら、すぐに雷を伴う大雨となり、降雨は5日間も続いた。至徳（いきほひ）まします天皇なり』と称えられたという。」

推古天皇によって6歳で巫女になって神に仕えたとされる皇極天皇は強烈な巫女的な権能を発揮して神がかった雨乞いで大成功をおさめた。徳が有るかどうかは天皇にとって重要な資質あり、雨乞いによって天皇の権威を示す結果となった。奇怪な記述であるが、結果が得られなければ民に失望されることも厭わず、果敢に挑戦して、成功を収めたといえる。

吉村武彦氏によれば

- 【・祝部のやり方はいわゆる民間信仰に基づく方法である。効果が無い。
- ・蘇我蝦夷のやり方は仏教の儀式にのっとっているが、効果はあるが、少しの雨だった。
- ・皇極天皇は「四方拝」という中国皇帝にならった祭祀によって雨乞いを行う。結果、5日間の降雨で効果が抜群であった。

民間信仰には効果が無く、仏教も小雨程度のわずかな効果であり、圧倒的な「天皇の祭祀」の勝利であることを日本書紀は強調している。】

確かに「天皇の祭祀」の圧倒的な勝利を強調するための潤色があったのだろうが、全く根も葉もない話をでっち上げたわけでは無かろう。

③ 645年の「乙巳に変」に天皇はかかわっていたのか？

これが皇極天皇の実像を解き明かす最大の謎と言える。

『（決行の4日前の）7月6日、中大兄皇子が蘇我倉山田石川麻呂臣に「三韓」（みつからひと）の調（みつぎ）を進（たてまつ）らむ日に、必ず将

（いまし）をして其の表（ふみ）を読み唱（あ）げしめむ」といふ。遂に入鹿を斬らむとする謀（はかりごと）を陳（の）ぶ。麻呂臣許し奉る。』と日本書紀にある。

「乙巳の変」の当日は「三韓朝貢の日」（百済、高句麗、新羅三国）という事になっていた。しかし、当時の半島情勢からして、三国が揃って倭国に朝貢してくる事などあり得ないことである。

百済と高句麗は2年前の643年に和睦していた。645年、唐の太宗が新羅の意向を受けて、高句麗に新羅との和解を求めたが、高句麗が拒否した。これをうけて太宗は高句麗に10万余の派兵をし、朝鮮半島は緊迫状態にあった。これが668年に新羅が朝鮮半島を統一するまで続く。

政治の最高権力者の位置にいた入鹿は当然この緊迫状態を知っていたので、宮廷内に不穏な空気があるのを察していたとも言われているが、三韓朝貢となれば参内せざるを得なかった。

①三韓朝貢は緊張関係の中でも存在していたという説もあるが、ありえないことであり、フィクションであろう。天皇抜きで、中大兄皇子と中臣鎌足が勝手にそのような設定はできないし、入鹿が参内したのは天皇の命令以外には考えられない。皇極天皇は「乙巳の変」の計画に関与していて、実行を容認していたと判断せざるを得ない。

②それに皇極天皇は蘇我入鹿暗殺に関わった者を一切処罰しなかった。

③皇極天皇は譲位したが、皇太后より他に例をみない尊号の「皇祖母尊（すめみおやのみこと）」が奉られている。

④また斉明天皇として重祚している。いずれも自らの意志によっている。隠然たる権力を持ち続けていたのだ。

⑤入鹿が暗殺される時に天皇に向かって発した言葉より、入鹿は天皇の意向によって暗殺されると思ったのに違いない。入鹿の問いを受けて天皇は中大兄皇子に問いただしたが、皇子の答えを聞くと暗殺を止めることなく無言で立ち去っている。承知していたことになる。

これらは皇極天皇が事件について事前に承知していたことを示唆している。

また、皇極天皇と入鹿が愛人関係にあったのではないかとの説があるが、暗殺を止めてもいないので、うがち過ぎと思われる。

天皇が入鹿暗殺計画を指図したか容認していたということを前提にして憶測すると、その後の事変の背景が浮かび上がってくる。

入鹿暗殺の功労者の蘇我倉山田石川麻呂が謀反の疑いをかけられて中大兄皇子により自殺に迫いやられている。蘇我氏の排斥と事件の首謀者を知る人物の抹殺が目的かもしれない。

④ 讓位について

諸説あるが、讓位と後継者決定までの展開が早い。

「乙巳の変」に関与し、宮廷の誰もが「三韓朝貢」が作り事であることがわかっているので、事件後には天皇が関与していることを知ってしまった。諸皇族や諸豪族を納得させるためには退位せざるを得なかったのであろう。あらかじめ同母弟の孝徳天皇に讓位することは決めていた。暗殺実行者の中大兄皇子も即位は出来ないし、そのことを承知していたのだろう。

飛鳥から遠く離れた（直線距離で約 14 キロメートル）斑鳩に拠点を置く山背大兄王への皇位継承は皇極天皇の念頭に無かったのかもしれない。

⑤ 古人大兄皇子殺害事件

「乙巳の変」勃発時、古人大兄皇子は私宮（大市宮）へ逃げ帰り「韓人が入鹿を殺した。私は心が痛い」（「韓人殺鞍作臣 吾心痛矣」）と言った。主某者を勘違いしたということであろうが、これをわざわざ日本書紀に書き入れたことに奇妙さを感じる。

古人大兄皇子は後ろ盾を失っただけでなく徐々に事件の背景が見えてきたので、事件後、皇極天皇の退位後に皇位に即く事を勧められても、それを断り出家して吉野へ隠退した。しかし、同年 9 月 12 日吉備笠垂（きびのかさのしだる）から「古人大兄皇子が謀反を企てている」との密告を受け、中大兄皇子が古人大兄皇子を攻め殺させたとされる。蘇我氏の血を引いていたため謀反を企てたとされ、抹殺されたのだろう。

「乙巳の変」の謀議を天皇が中大兄皇子から事前に打ち明けられていたのであれば、天皇は血の繋がりのない古人大兄皇子の抹殺も事前に知っていて、了解していたと考えるのが自然であろう。あるいはその指示をした可能性を無視できない。

⑥ 継嗣候補

皇祖母尊は諸皇族と諸豪族の間で隠然たる影響力を持ち続けたのだ。皇祖母尊とその周辺の重臣たちは中大兄皇子の即位には抵抗を感じていたらしく、皇位継承者として、皇祖母尊の意中にあつたのは、最も寵愛していた「皇孫」建王（たけるのみこ）である。中大兄皇子と蘇我倉山田石川麻呂の娘・遠智娘（おちのいらつめ）の皇子だ。勿論、このことは中大兄皇子も承知していたのだろう。と見ればさらに浮かび上がってくるものがある。

⑦ 孝徳天皇、難波宮置き去り事件

皇太子（中大兄皇子）が倭京に遷ることを請うたが、天皇は許さなかった。皇太子は、皇祖母尊（すめみおやのみこと、皇極前天皇）と皇后（間人）、皇弟を連れて飛鳥河辺行宮に行った。公卿大夫（まえつきみ）・百官の人らが皆随（したが）って遷（うつ）ったが、日本書紀にはその理由について触れていない。書紀の編纂を指揮した天武天皇は行動を共にしていたので、背景を良く知っていたにも関わらず書いていないのは公にしたくないことだからであろう。

一説に「何れ半島は唐に倒されると読んで、唐と鋭く対立する半島勢力とは距離を置くべきだと考えていた孝明天皇とあくまでも朝鮮半島の救済と奪還、利権の確保を念頭に置いていた皇祖母尊及び中大兄皇子は激しく対立し、そのために孝徳天皇一人を置き去りにして、皇祖母尊等は飛鳥に遷ってしまった。」というのがあるが、その可能性はある。しかし、それならそのように日本書紀に書いてもよさそうなのに書かなかったのは謎である。

飛鳥に遷る正義を語るができなく、明らかにすることを憚るような理由だったのだろう。あえて曲筆することもしなかった。

幸徳天皇が即位すると「難波遷都の詔」を発令し、新しい国作りへの決意を示した（新政権が最適地と判じる他所へ移転する慣わしがあった）。

孝徳天皇は抵抗勢力の多い飛鳥から離れた難波宮で新しい国作りを思い通りに遂行したかったのだろう。「改新の詔」を発し、改革を推進する。

が、皇祖母尊をはじめ大兄皇子、諸皇族や諸豪族の多くは飛鳥を離れたくなかったし、最初から難波遷都は想定外だったのではなかろうか。諸皇族や諸豪族の意を受けて、孝徳天皇に倭京への遷都を持ち出したのではなかろうか。そして、孝徳天皇は空気を読めなかったのかもしれない。その結果、孝徳天皇は一人難波宮に置き去りにされてしまう。

皇祖母尊が重祚して斉明天皇に即位した後、飛鳥京の造営に心血を注いでいるので、飛鳥に相当執着していたことが分かる。この背景には皇祖母尊の関与が疑われても仕方なかろう。

のちに、天智天皇が即位して、飛鳥から遠い近江大津宮に遷都したが、抵抗勢力の多い飛鳥から離れるためだったと言われている。しかし、僅5年後、天武天皇は即位すると都を近江大津宮より飛鳥に遷した。人臣の支持を得て即位する、あるいは皇位を持続するには、倭京に都を置くことが必要だったのかもしれない。

日本書紀に誰もが疑問に思うことに触れていないのは皇祖母尊の関与を隠したかったからで、曲筆も憚ったのだろう。

孝徳天皇が難波宮でこのまま孝徳天皇の世が続けば、次期天皇は有馬皇子が即位するのは必定である。それを阻止するためには何としても都を倭京に

戻し、皇祖母尊が政権をコントロール可能にする必要性が生じた。諸皇族や諸豪族と謀り、中大兄皇子から孝徳天皇に都を倭京に戻ることを提案させた。案の定、孝徳天皇は拒否。そして孝徳天皇を一人難波宮に置き去りにすることに成功したのだ。皇祖母尊が皇后・間人皇女も飛鳥と一緒に連れ戻したとすれば納得し易い。

⑧ 健皇子の薨去

655年、孝徳天皇の病没に伴い、斉明天皇として重祚する。

658年5月、建王が8才で薨去（こうきょ、皇族または三位（さんみ）以上の貴人の死去すること）する。その際に天皇は深く悲しみ、将来的に自らの陵（みささぎ）への合葬を命じるとともに、次の歌3首を詠んでいる。別の顔が見えてくる。

○今城なる 小丘が上に 雲だにも 著くし立たば 何か歎かむ

（いまきなる をむれがうへに くもだにも しるくしたたば なにかなげかむ）

○射ゆ鹿猪を 認ぐ川上の 若草の 若くありきと 吾が思はなくに

（いゆししを つなぐかはへの わかくさの わかくありきと あがもはなくに）

○飛鳥川 漲らひつつ 行く水の 間も無くも 思ほゆるかも

（あすかがは みなぎらひつつ ゆくみづの あひだもなくも おもほゆるかも）

この後斉明天皇の意中の後継者は不明だが、いなかったのかも知れない。

⑨ 有馬皇子謀殺事件

皇位後継候補の建王が死没し、ほんの数カ月後の事件である。建王が死没した後、俄然有馬皇子が後継候補として有力になってくる。謀反を企てたことにして早めに芽を摘み取ったのだろう。斉明天皇が紀の湯に行幸して留守の間の出来事だ。留守の間ということに何か臭ってくるような気がする。

⑩ 朝鮮半島の介入と斉明天皇崩御

従来、朝鮮の国々より朝貢を受けていたが、唐の朝鮮半島への介入で、百済からの朝貢を失ってしまった。この時期、「阿倍比羅夫」（あべのひらふ）を送り込み、北方を拠点としていた「蝦夷」（えみし）と「肅慎」（みしはせ）を平定し支配区域を拡大したことの成功体験が拡大路線に繋がったのかもしれない。朝貢の利権確保の魅力が倭国の敗戦で唐に浸食されるかもしれないというリスクを上回ったのであろう。また、唐が半島を支配してしまうと、続いて倭国が侵略され

るかも知れないという恐怖感もあったのであろう。政権内部で喧々諤々の議論があったものと憶測する。

その議論の過程で、斉明天皇の死に絡む出来事が発生したかも知れないというのはうがち過ぎだろうか？

⑪ 斉明天皇崩御

『日本書紀』には「天皇（すめらみこと）、朝倉宮に崩（かむあが）りましぬ」とだけ記載されている。高齢とは言え、その直前までは普段通りに行動していた中での突然の死であるが、病状や死因が全く記載されていない。後継者指名もしていないので、通常の病死とは思えない。突然死だったにせよ、日本書紀に、死因に関し何らかの記録があってもおかしくない。

それに、皇太子は天皇の喪に付き添い、飛鳥に帰り、朝倉宮に帰っていない。皇太子が自らの意志で半島への侵行を決定していたのなら、前線基地に戻るのではなかろうか。謎である。

斉明天皇の急死には不審な気配が伝承に残っているとの説を紹介する。

「中大兄皇子は唐との戦いを前にして朝倉橋広庭宮を廃棄して立ち去っている。さらに即位せず、皇太子のまま辣腕をふるった。

白村江の戦いでは、自らは九州を離れて後飛鳥岡本宮に引っ込み、阿曇比羅夫（あずみのひらふ、武将）を戦死させ、筑紫君以下、筑紫国の兵士などが捕虜になるなど敗戦を強行させた。

斉明天皇の朝倉橋広庭宮での死は中大兄皇子（天智天皇）の陰謀のようであった。」と。

この説を全く無視するわけにはいかないようだ。

唐・新羅連合軍と戦うことのリスクについて政権内部で軋轢が生じ、何か不穏なことがあった可能性は否定しきれない。

○白村江の戦い

百済と新羅の戦いが続いたが、唐が新羅の求めに応じて参戦していた。百済に救援を求められた倭国が663年に参戦したが、白村江の戦いで惨敗。

中大兄皇子は、斉明天皇の死後7年を経て668年2月20日にやっと即位した。後継者に指名されていなかったことと、斉明天皇崩御直後に即位することを躊躇われる何かがあって、諸皇族や諸豪族の信頼を得られる時間が必要だったのかもしれない。

弟の大海皇子を皇太弟としたが、671年、第1皇子・大友皇子を史上初の太政大臣にした。それにより、やがて壬申の乱（大海皇子と大友皇子の後継者争い）が発生する。本当に大海皇子が皇太弟に就任していたのだろうか。

5. 最期に

女帝の就任は、山背大兄皇子（やましろのおおえのおうじ）に気がねする蘇我蝦夷によるものだったので、自らの意志とは無関係に、642年に女帝の道を歩み始める。しかし、在位期間は推古天皇の36年間には及ばなかったが、33年間の長期に及んだとされる。

しかし、単に蘇我氏に担がられただけではなく、蘇我一族を排斥し、親政を実現しようとする女帝の意思が大いに働いていたのだろう。後継候補にバトンタッチせず重祚して、中央政権化の改革を進めた。唐が朝鮮半島に侵攻するという緊張の中で、斉明天皇は支配力拡大のため、阿倍比羅夫（あべのひらふ）に命じて日本海側（現在の秋田地方）の蝦夷（えみし）征討を行った。この成功体験が朝鮮半島の利権確保に向かわせてのかもしれない。また、飛鳥の大土木事業にも着手。後飛鳥岡本宮（のちのあすかおかもとのみや）、多武峰（とうのみね）の両槻宮（ふたつきのみや）などの造営の他、運河を掘削し、大量の石材を運び、石垣を築いた。土木工事に多くの民衆を徴発し、「狂心（たぶれこころ）の渠（みぞ）」と批判を受けたが、天皇の権威を示す計画的な飛鳥京づくりに積極的に取り組んだ。朝鮮半島介入のための基地・朝倉宮（あさくらのみや）（福岡県朝倉市）に老体に鞭打って自ら赴いた。このように中大兄皇子に政務を任せ切りにしたことはなかったのだ。自らの強烈な意思で天皇中心の中央集権化や周辺国からの利権獲得に執念を燃やし、そのために皇位に就き続けた。

それにしても多くの謎を残した。

○斉明天皇越智岡上陵（さいめいてんのう おちのおかのえのみささぎ）



©宮内庁

- 代 数 : 第37代(第35代 皇極天皇が重祚)
- 天 皇 名 : 斉明天皇
(さいめいてんのう)
- 御 父 : 茅渟王
- 御 母 : 妃吉備姫王
- 御 陵 名 : 越智岡上陵
(おちのおかのえのみささぎ)
- 陵 形 : 円丘
- 所 在 地 : 奈良県高市郡高取町大字車木
- 交通機関等 : 近鉄「橿原神宮前」からバス「郡界橋」下車東へ 0.5km

参考文献

- ・岩波書店；「日本書紀」
- ・吉村武彦著；「大化改新を考える」
- ・ウィキペディア

以上